

金融史パネル

1960年代の国際通貨・金融システム 国際金融史の視点から

オーガナイザー 矢後和彦（首都大学東京）

パネルの趣旨：

国際金融史上の1960年代は、ブレトンウッズ体制のパッチワークが試みられた時代であり、ブレトンウッズ体制の終末期、また来るべき変動相場制への過渡期として、やや消極的な位置づけを与えられてきたようである。しかしながら、近年の国際通貨制度をめぐる改革論議の原型はこの1960年代に胚胎しており、国際銀行や国際金融機関も当該期に重要な経験を蓄積している。本パネルでは、G10（シェンク報告）、英系国際銀行（菅原報告）、BIS（クレメント報告）という3つの視点から、1960年代における国際金融システム、とりわけその改革をめぐる論議と経験を歴史的に再評価することをこころみる。なお、シェンク報告とクレメント報告は英語でおこなう。